

第8回甲子園塾

日本高等学校野球連盟主催 甲子園塾 報告書



日時：平成27年12月4日（金）～6日（日）

会場：中沢佐伯記念野球会館・大阪市立汎愛高等学校

長野県飯山高等学校

野球部顧問 高重陽介

～目次～

はじめに	3
第2回甲子園塾の概要	4
都道府県連盟の役割	6
アンチ・ドーピングについて	9
指導者としての基本的な考え方	12
日本の球史	19
新入部員の指導についての班別討議	22
部活動の役割と課題	25
部員とのコミュニケーションの図り方	27
不祥事件の取り扱いの防止	30
体罰についての班別討議	32
実技	35
参考資料	46
おわりに	47

～はじめに～

今回、日本高等学校野球連盟主催「第8回甲子園塾」を受講させていただき、非常に多くの刺激と示唆をいただきました。その内容を形に表すことで私自身の頭の整理はもちろんですが、この報告書をもとに多くの方とともに向上していけたら嬉しく思います。

拙い文章で読み取りにくい部分もあるかとは思いますが、また甲子園塾での内容をまとめた今回の報告書は私を通した形になりますので、講師の先生方の本意が伝わらない部分もあるかとは思いますが、その点ご容赦いただき、目を通していただければ幸いです。

日頃より膨大な仕事に追われる中、今回の甲子園塾を企画運営して下さった日本高等学校野球連盟のみなさま、溢れる情熱で受講生を指導して下さった山下塾長始め、大藤敏行先生、東哲平先生、小島仁章先生、甲子園塾で出会えた全国の指導者の方々、そして甲子園塾に参加する機会を与えて下さった、長野県高等学校野球連盟のみなさまに心より感謝し、本報告書での挨拶とさせていただきます。

～第2回甲子園塾の概要～

1. 趣 旨 ①高校野球のよき指導者となるために、高校野球の歴史、指導者としての心構え、指導方法などを研修する。
 ②受講生同士の交流を深め、指導者としてのネットワーク作りの一助とする。
 ③都道府県連盟、審判員とのより良い関係について研修する。

2. 講 師 塾長 山下 智茂 (技術・振興委員会副委員長、元石川県星稜高校監督)
 大藤 敏行 (技術・振興委員会委員、元中京大中京高校監督)
 東 哲平 (敦賀気比高校監督)
 小島 仁章 (北海道高等学校野球連盟専務理事)
 常本 明 (日本高等学校野球連盟審議委員長)

3. 会 場 講義：中沢佐伯記念野球会館
 実技：大阪市立汎愛高等学校

4. 受講者	北海道	山崎 進	北海道天塩高等学校	監督
	岩手	平野 健	岩手県立西和賀高等学校	監督
	山形	色魔 貴幸	山形県立村山高等学校	監督
	福島	遠藤 将太	福島県立平商業高等学校	監督
	栃木	須永 穂積	栃木県立佐野東高等学校	監督
	埼玉	片野 飛鳥	埼玉県立川口青陵高等学校	監督
	千葉	松本 徳浩	千葉県立磯辺高等学校	監督
	東京	赤澤 秀幸	都立大島高等学校	責任教師
	神奈川	天野 雄司	神奈川立寒川高等学校	監督
	長野	高重 陽介	長野県飯山高等学校	顧問
	富山	高橋 将志	富山県立南破福光高等学校	監督
	福井	城野 克宜	福井県立敦賀高等学校	責任教師
	岐阜	小俣 太志	岐阜県立大垣養老高等学校	監督
	愛知	井上 大輔	愛知県立愛知商業高等学校	監督
	滋賀	川越健一郎	滋賀県立東大津高等学校	顧問
	奈良	赤坂 誠治	奈良市立高田商業高等学校	監督
	大阪	河島 紘之	大阪府立藤井寺高等学校	監督
	兵庫	三輪 剛大	兵庫県立上郡高等学校	責任教師
	岡山	藤井 孝正	岡山県立岡山東商業高等学校	監督
	広島	赤澤賢祐	広島県立安西高等学校	監督
	山口	秋本 篤志	柳井学園高等学校	責任教師
	愛媛	和田健太郎	愛媛県立東温高等学校	監督
	高知	常廣 直樹	高知県立高知追手前高等学校	監督
	佐賀	佐野 努	佐賀県立佐賀高等学校	監督
	熊本	児玉 豊	県立佐賀個工業高等学校	監督
	宮崎	飯田 正	宮崎県立飯野学校	監督
	沖縄	宮里 友也	沖縄県立宮古高等学校	責任教師

～都道府県連盟の役割～

北海道高等学校野球連盟専務理事 小島 仁章氏

都道府県連盟の役割について、私も含め受講者が質問に答えることができない場面もあり、緊張感ある講義となった。北海道独自の取り組みも紹介していただき、非常に参考になった。

《受講者への要望》

- ①高校野球に携わる人間として、学生野球憲章に目を通す必要がある。

ー前文の最後ー

「もちろん、ここに盛られたルールの全てが永久不変のものとは限らない。しかし、学生の『教育を受ける権利』を前提とする『教育の一環としての学生野球』という基本的理解に即して作られた憲章の本質的構造部分は、学生野球関係者はもちろん、我が国社会全体からも支持され続けるであろう。」

- ②都道府県高等学校野球連盟の組織

- ・各都道府県連盟の目的は日本高等学校野球連盟と同じである。
- ・各都道府県連盟は加盟校によって組織されている。
- ・全てのことが各都道府県連盟で一致しているわけではない。

- 法人格
- 事務所（事務局）
- 財務規模
- 業務内容
- 役員の身分 など

- ③一般財団法人北海道高等学校野球連盟について

- I. 人口 5,407,928 人（都道府県順位第 8 位）
- II. 面積 83,424.22 km²（都道府県順位第 1 位）
- III. 高等学校数 302 校（公立 244 校 私立 58 校 中等教育学校 2 校）
- IV. 高野連加盟校数 硬式－239 校 軟式－15 校
- V. 加盟校部員総数 7,504 人（平成 27 年度） *野球人口の減少がない
（硬式 7,262 人 軟式 242 人）
- VI. 広域性から 10 の支部を編成している
- VII. 北海道高等学校野球連盟審判部 昭和 45 年設立
- VIII. その他

- ④甲子園に出場するために連盟に加盟している。→加盟するからにはルールの順守が必要

⇒日本学生野球憲章（資料参照）や大会参加者資格規定（資料参照）、高校野球特別規則等の確認が再度必要。

⑤球場補助員等に対し、感謝の気持ちと積極的に協力する姿勢をお願いしたい。

⇒連盟役員を経験することで違った見方、考え方ができるのではないか。

⑥北海道高野連の取り組み

< 1 > 審判部組織の維持向上

・指導者を審判に割り当てる⇒審判講習会を実施し、練習試合等は指導者が審判を行う

 メリット：ルール指導が行いやすい

 経費削減

 デメリット：指導時間の減少

< 2 > NPO 法人との連携

・NPO 法人北海道野球協議会と連携し、野球フェスティバル（小中高の連携）や野球教室、球場調整、審判研修会等を行なっている。NPO 法人北海道野球協議会は平成 12 年 6 月に設立され、現在加盟団体は 16 団体に至っている。

・10 地区でそれぞれ独立して指導者を招待し行う為、地域との密着が図れる

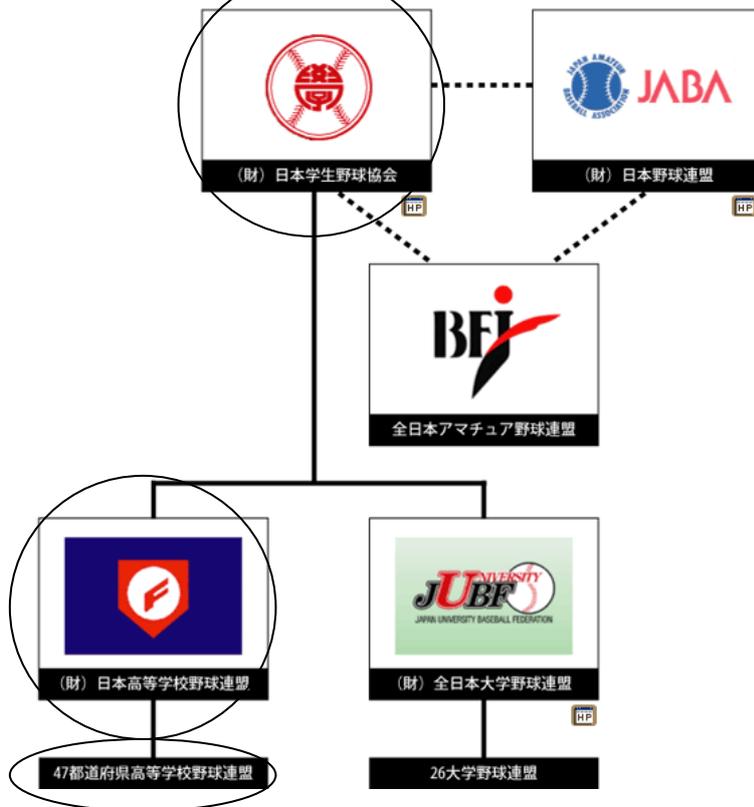
・中高連携の大きな役割を担っている

・オフシーズンに時間をかけて、企画運営する為、全国の指導者を招致しやすい。

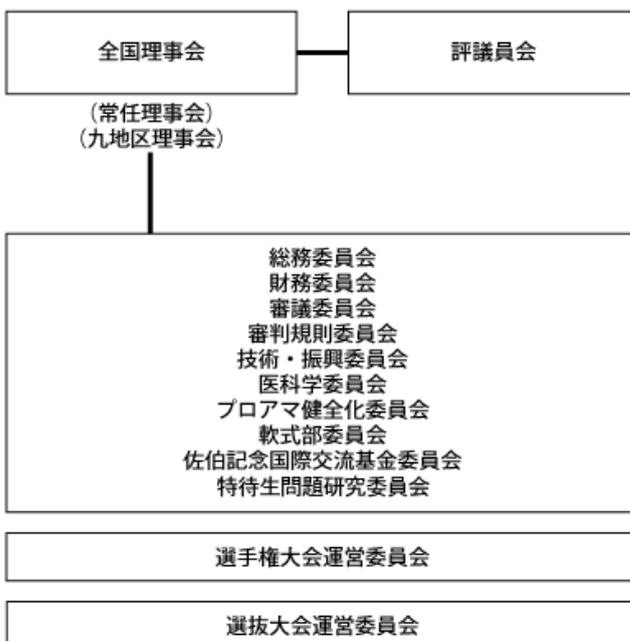
・全国的な問題である野球人口の減少は北海道では問題になっていない

→野球の楽しさを味わう機会を作ることが重要ではないか。

<アマチュア野球 組織図>



<日本高等学校野球連盟 組織図>



～アンチ・ドーピングについて～

日本アンチ・ドーピング機構

現在、地区予選、甲子園大会ではドーピング検査は実施されていないが、世界大会においてはドーピング検査が実施されている。国内だけでなく、世界に目を向け、国際大会で活躍する選手の育成も考え、アンチ・ドーピングについて考えを深めて欲しいという願いによって、第7回甲子園塾から、この講義内容が加わった。

○スポーツを取り巻く問題

→人種差別、パワハラ、ドーピング、賭博、八百長、暴力などがある

○ドーピングとは

「競技力を向上するために、禁止物質・禁止方法を使用すること」である。

→なぜ禁止なのか。

①健康を害する

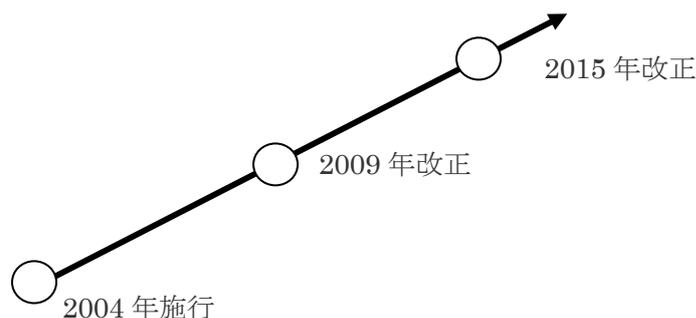
②アンフェアである

その結果、スポーツの崩壊、スポーツの価値を損なう

*スポーツの価値を繋ぎ合わせるのがPLAY TRUEの精神

①全ては世界アンチ・ドーピング規定に示されており、全世界・全スポーツ統一である

(アスリート、サポートスタッフ、連盟、機構、政府によってつくられた規定)



②アスリートには6つの役割と責務がある

I,ルールを理解し守る

II,いつでも・どこでも検査に対応

III,身体に取り入れるものに責任を持つ

IV,アスリートとしての自分の立場と責務を伝える

V,過去の違反を正直に伝える

VI,アンチ・ドーピング捜査に協力する

③アンチ・ドーピング規則違反

(世界アンチ・ドーピング規定では、アスリートの「厳格責任」「証明責任」が求められる)

- I,採取した尿や血液に禁止物質が存在すること
- II,禁止物質・禁止方法の使用または使用を企てること
- III,ドーピング検査を拒否または避けること
- IV,ドーピング・コントロールを妨害または妨害しようとする事
- V,居場所情報関連の義務を果たさないこと
- VI,正当な理由なく禁止物質・禁止方法を持っていること
- VII,禁止物質・禁止方法を不正に取引し、入手しようとする事
- VIII,アスリートに対して禁止物質・禁止方法を使用または使用を企てること
- IX,アンチ・ドーピング規則違反を手伝い、促し、共謀し、関与すること
- X,アンチ・ドーピング規則違反に関与していた人とスポーツの場で関係を持つこと

④制裁措置

<個人に対して>

- ・成績の取り消し
- ・資格停止（トレーニングに関しても）

<チーム>

- ・参加資格の停止
- ・チームへの制裁

*違反者が意図したかどうかは関係がない。(厳格責任)

⑤規則違反

- ・平成 26 年における全世界の規則違反は 1443 件
日本の規則違反は 7 件
- ・野球に関する規則違反は世界で 6 件

⑥国内事例

- ・ほとんどが医薬品（病院・薬局で販売）であり、日常生活から注意する必要がある
→正しい情報を入手する。 禁止表国際基準（毎年 1 月 1 日に更新）

⑦自分のリスクマネージメントを怠らない

- ・専門家に相談する
(スポーツドクター、スポーツファーマシスト、G l o b a l D R O)
 - ・医薬品には全成分が表示されているが、漢方やサプリメントには表示義務がないため注意する必要がある。
- *摂取したものは全て自己責任だという自覚を持つ。

○最後に

- コーチや選手の周りの考え方によって、アスリーの行動に大きな影響が出る。
ジュニアアスリートは自己管理ができないため、指導者の知識が非常に大切になる。
- W i n n e r（勝者）ではなく、C h a m p i o n（真のチャンピオン）を目指す。
→他者から尊敬される行動を自らとれる選手をつくる。

～指導者としての基本的な考え方～

敦賀気比高等学校 東 哲平氏

《選手について》

- ・選手の考え方を変える

入学前

入学後

100%野球を頑張る → 野球を頑張るが、野球以外にも頑張る に変化させていく。

- ・選手の考え方を変えるために・・・

- ① 練習は掃除から始まる
- ② 授業態度の悪い選手は許さない
- ③ 点数の悪い生徒は練習できない (課題や授業への取り組み)

* 野球部以外の先生から可愛がられる、継続して頑張れる生徒の育成を目指す。

- ・選手の能力を高める

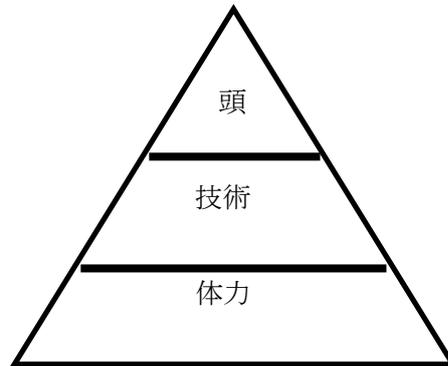
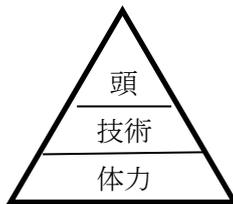
→ 心・体・技・頭

*まず、心の姿勢をつくる

- ・選手の心に火をつける

(チャンスを与え、チャンスをつかんで成功したときに選手の心は火がつく)

- ・スケールの大きな選手を育てる



- ・選手の問題点を見つける

→ 投・打・捕・走に関して課題を明確にしていく。

課題は、投 (心・体・技・頭)

打 (心・体・技・頭)

捕 (心・体・技・頭)

走 (心・体・技・頭)

4つの観点を、さらに4つの観点で考えていく

- ・選手が選択できる環境づくりに努める
(漫画、テレビ、スマートフォンなどに関しては自己責任で使わせている)
- ・選手の能力を引き出すために、「ああしなさい、こうしなさい」といった強制をできるだけ排除する

◇選手の能力を引き出すために・・・思い切って生徒をグラウンドで暴れさせる！

- | | | |
|---|---|-----------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ①思い切り投げる ②思い切り打つ ③思い切り走る ④怖がらずに捕りに行く | } | <p>スケールの
大きい選手をつくる！</p> |
|---|---|-----------------------------|

*ミスしたら負けるチームではなく、ミスをしてでも勝てるチームをつくる。

◇選手を見抜く

- | | | |
|---|---|----------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ①練習前の掃除 ②学校での姿勢 ③野球に対する姿勢 ④寮生活での姿勢 | <p>選手の“姿勢”を観察する</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>選手のプレーを観察する</p> | <p>繋がりがあ
る</p> |
|---|---|----------------------------------|

<まとめ>

- ①選手の考え方を变える
- ②選手の能力を高める
- ③選手の問題点を見つける
- ④選手の能力を引き出す
- ⑤選手を見抜く

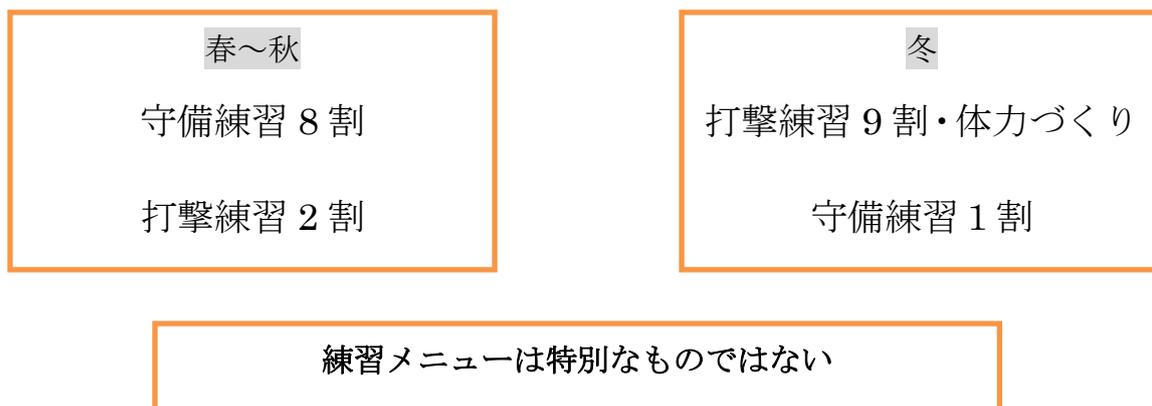
《練習について》

- ・練習については基本的に1日3.5時間にしている
(16:00～20:00 最初の30分は清掃時間 体育コースの廃止により練習時間が変化した)
- ・就任当初はとにかく練習を「やらせていた」
甲子園出場によって、「練習すれば甲子園に行ける。」という伝統ができた。
現在は強制的に追い込まなくても、選手自身が自主的に追い込んでいけるようになった。

～練習時間の短縮によって得られた利点～

- ①練習密度が上昇した
- ②選手の体力が回復した
- ③選手の故障が減った

◇練習内容について



*冬は割り切って振ることと体力づくりに特化した練習を行っていく

◇練習内容の基本になっている考え方は、

- ①思い切り投げる
- ②思い切り打つ
- ③思い切り走る *スケールの大きな選手を育てる
- ④怖がらずに捕りに行く

《戦術について》

・守備における優先順位を間違えないように教え込む

- ①ボールを捕りに行く
- ②ベースをカバーする
- ③バックアップに走る

注：カットプレーに動く

*この4つの動きは徹底的に反復練習を積む

・守りからリズムを作れるチーム作りを目指す

→積極的にボールに関わる選手をつくる

- ・打撃に関しては、しっかり振れるチームをつくる
→冬の練習で徹底的に振らせる。指導者が妥協せずとにかく振らせていく。
トスを指導者があげることで選手の気持ちは上がる。
冬の練習で一緒になって練習に参加していくことで、惰性の練習にならない

◇チームを完成品にしない

＜精度の高い野球＞ よりも ＜スケールの大きい野球＞ を目指す。

- ・試合をするたびに成長するチームづくり
→練習では光らなくても、試合で光る選手が必ずいる。そういった選手を見つけていく
- ・勝利と育成は指導の両輪となる。社会に出ても野球を続けていく選手を多く作ることを目指している。

《己について》

- ・信念を持って指導にあたる。(指導者の信念が揺らぐと選手が迷ってしまう)
- ・指導者としての幹(信念)に対し、葉(理論・方法)は開いて、枯れて、散るを繰り返す。

*変えていく部分と、変わらない部分を分ける

- ・葉(理論・方法)に関しては常に疑問を持つ
→帝京高校に敗れて、体づくりの重要性に気づき、勉強を始めた
日大三高に敗れて、スイングに力を入れるようになった。
時には自分自身も生徒と同じ練習をすることで、現役の頃わからなかったことがわかる瞬間がある。
- ・進路に責任を持つ
- ・OB・学校を味方にする
(学校全体が野球部を応援する雰囲気をつくっていく)

～指導者としての基本的な考え方～

元中京大中京高校監督 大藤 敏行氏

《経過と取り組み》

○平成2年ー28歳で監督に就任

学校の方針でALL3からALL4の学校に変化した

○引退試合の実施

- ・3月で実質引退する3年生がいる現状を含め、メンバー外の3年生による引退試合を始めるようになった。
- ・引退試合のDVDの作成（決意表明や想いなどを収録）
- ・決勝と同じ球場、時間帯、雰囲気で行う
- ・メンバーの3年生が試合を応援・サポートする

○留魂（グラウンドにある石碑の言葉）

みんなが苦難に耐えた

みんなが死線を越えた

みんなが栄光を握った

みんなが伝統を守った

そして今も

みんなが見守っている

応援している

願っている

- ・「みんな」という言葉が意味するもの、石碑に掘られた整備している姿の選手が意味するもの。ここに先人たちの想いがつまっている事を新入生に教える

○色んなプロをつくる

- ・投げる人、捕る人、守る人、ボールを拾う人・・・

***かけがえのない控え選手の存在がチームを強くしていく**

ーエピソードー

- ・合宿の食事当番や洗濯は全てメンバー外の3年生の仕事

嫌な顔1つせず取り組む3年生の姿をみて、メンバーが色んな想いを感じていく

- ・メンバーを外れても、大会が終わるまでメンバーと一緒にトレーニングに励む姿、辛い練習には、横について励ます姿、アメリカンノックと一緒に走って声をかける姿

《人との出会い》

①嶋選手

- ・ 中学時代成績が良く、進学校への進学を勧めた。2年の夏までは控えであり、本人から、「マネージャーをやりたい」という相談があった。
- ・ 夏休みを越えて、芽が出始め新チームから試合に出始めた。
- ・ 大学1年生の冬に手紙を送ってきた内容が素晴らしかった。
(『中京魂 大藤敏行著』のなかで紹介されている手紙)

- ①目標設定の仕方
- ②人間が野球をするんだ
- ③野球における本当の楽しさ
- ④レギュラーだけでない高校野球に大切なこと

*正しい考え・正しい努力・正しい結果

- ・ “正しい” がポイント
- ・ 努力をしたから結果が伴うというわけではない
ただし、努力は結果への確率を高めてくれるものであると教えてくれた。

*目標設定の仕方

- ・ 近未来 → 中期 → 長期

・誰でもできることをやり続ける

→ 野球は同じ動作の繰り返し・・・高校生には努力の継続を学んで欲しい

②山本昌選手

- ・ プロとしての1番の素質は、努力を継続できること。

③坂口先生（元東邦監督）

- ・ 2年目で負けたとき“技術”で負けたと思った
→ 新チームで甲子園に出場し、国体を控えた東邦の3年生と試合をした
この3年生の姿をみて、野球ではなく人間力の差で負けたと感じた。

“人間の成長無くして、技術（野球）の進歩無し”

- ・ 坂口先生でも公式戦は怖い・・・同じ人間だと思った

④地元の新聞記者

- ・ 「あなたでは勝てない」と言われた。
- ・ なぜ自分が日本一の練習をしているという自負があるのに、大勢の前でそれを公言して「優勝します。」と言わないのか。生徒がかawaiiそうではないか？

《考え方》

- ・ 覚悟の持ち方

本当に甲子園を目指している学校は、「グラウンドに入る一步の覚悟が違う」

→ 1 歩・ 1 球・ 一瞬・ 一振りの覚悟

- ・ チームとして選手が想いを共有できるスローガンを決める

e x : 最後の最後の最後までやりきる (堂林の代)

- ・ 勝つことに真剣になる

全国制覇は全国制覇を本気で目指した人間にしかできない

- ・ 指導者の心の遊び

「野球は所詮ガキの毬遊び」と考えられるようになった

ただし、色んな生徒の想いがあり、結果ではなく、仲間と共に真剣に野球に取り組む尊さを忘れない

→ 引退し、卒業し、将来高校時代を語り合える仲間をつくって欲しい

～日本の球史～

講師：日本高等学校野球連盟 井本 亘氏

ここでは、米国でのベースボール誕生にかかるエピソードや日本での野球の発展に関する話題などその内容は興味深いものであった。高校時代のコーチが「まずは赴任した高校の歴史を調べなさい」と言っていたのを思い出した。同じように、私自身野球について知らないことが多く勉強不足を日々痛感していたが、今回をきっかけに今一度野球について勉強しなおすことが必要であると感じた。

《ベースボール誕生当時の精神》

- ・ **民主主義**を基にしたルール（移民の人々の心の声）
- ・ ヒットを打っても本塁に戻らなければ得点にならない⇒各塁は途中寄港の発想？
※当時は捕鯨が盛んであり、1845年原型を考案したアレキサンダー・カートライトの父は捕鯨をしていた。
- ・ ファウルラインは「もっと近くで見たい」という要望から生まれた⇒見るスポーツへ
※タウンボールはどこへ打ってもよかった
- ・ 外野は自由な設定
※民主主義によりみんなが納得したらOK
- ・ 当時から**フェアプレイ**が重要⇒フェアプレイはタウンボール後のパーティーで表彰
- ・ 審判員は1人で、**観客が陪審員**⇒審判がジャッジを大きく行う一つの要因

《野球の七不思議》

- ・ 守備側のチームがボールを支配している ⇒ 他のスポーツにはなかなかないルール
- ・ タイムゲームではない ⇒ 最後の一球を投じる必要性
- ・ 投手のマウンド ⇒ 雨対策
- ・ ホームベースの形 ⇒ カーブピッチャーの存在
- ・ 帽子の着用 ⇒ ユニフォームの原型は軍服
- ・ まず1塁へ走る理由 ⇒ 当時は下投げで3塁に強い打球多かった
- ・ ストッキングのデザイン ⇒ 敗血症対策

《ベースボール初期のルール変遷》

1845年 空振り3回で打者アウト

1858年 3つ目を見逃した場合もカウントすることに

Good ball strike you out!!

1863年 ボールのカウント始まる

1876年 9ボールで1塁へ

(80年には8ボール、81年には7ボール、84年には6ボール、86年には7ボール)

1884年 投球は上手投げとなる

1887年 5ボールとなり、この年だけ4ストライク

1889年 3ストライクと4ボールで四球が定着

1893年 投手板とホームプレートの距離が18.44mとなる

1900年 ホームベースが五角形となる（フレデリック・シュミットの影響）

《人物紹介》

・アレキサンダー・カートライト（1820～1892）

捕鯨一家の出身で、銀行勤務のあと事務用品の店を手掛ける。

マンハッタン地域の防火のため消防団を結成し、ニッカーボッカーズも結成。

ベースボールの原型を作った。

・ヘンリー・チャドウィック（1824～1908）

ベースボールの草創期に50年間にわたって新聞記者として勤めた。

プレイを数量化、表示するボックススコアを考案。

1858年創設のルール委員会委員長に就任。

「ベースボールを米国の国技にするなら、絶対に賭博をやめなさい」とキャンペーン。

《日本での野球の誕生》

・フォーレス・ウィルソン（1843～1927）

明治4（1871）年8月21日 明治政府のお雇い教師として来日。

第一大学区第一番中学（現東京大学の前身）で主に数学と英語を教えた。

明治5（1872）年 学生たちの生活を憂慮し戸外の運動を奨励しベースボールを指導。

※来日以前に南北戦争において北軍でベースボールを教わっている。

・フレデリック・ウィリアム・ストレンジ

明治8（1875）年 20歳の時、東京英語学校（大学予備門の前身）の教師として来日。

明治16（1883）年 学校スポーツの必要性を説き、日本で初めて陸上運動会を開催。

フェアプレイを提唱した。

《フレデリック・ウィリアム・ストレンジの教え（佐山和夫氏の解説）》

- 1) 定刻を厳守せよ。
- 2) 奮闘努力せよ。負けても、負け惜しみを言うな。
- 3) 競技は公正明大にやれ。卑怯なことをするな。
- 4) 審判に服従せよ。人は神に非ず。ときに判定を誤ることもあるが、異議を唱えず、冷静

を保て。

- 5) プレーを楽しめ。自分より優れた相手を敵視するのではなく、師とせよ。
- 6) 賞品は記念品のみとせよ。
- 7) 儉約はスポーツマンの第一の信条。他人に憐みを乞うてまでして贅沢をするものではない。
- 8) 練習は学業の暇にせよ。そして練習場に立ったときには、さっさと練習をして、終わったら速やかに去れ。長く残っても気迫が弛緩するだけだ。克己、節制、制欲、忍耐、勇敢、沈着、敏活にして機知縦横、明快にして気宇壮大、これらの気質特性こそ、天がスポーツマンに与える最高の賞品ではないか。

《野球の名付け親》

・中馬 庚 (1870～1932)

明治3 (1870) 年 鹿児島市西千石町で生まれる

明治15 (1882) 年 西郷隆盛設立の三州義塾に入学

明治21 (1888) 年 第一高等中学校 (一高の前身) に入学
名二墨手として活躍

明治26 (1893) 年 東京帝国大学入学

明治27 (1894) 年 校友会雑誌 例言で「野球」訳を発表

明治29 (1896) 年 一高が横浜外国人クラブを破ったときの引率者

明治30 (1897) 年 我が国初の野球専門書「野球」を著す
同大学史学化を卒業

※その後、全国各地で教員として勤める。

昭和45 (1970) 年 野球殿堂入り

《正岡子規 (1867～1902) の功績》

・多数の日本語訳を考案

例) 打者、走者、直球、飛球、死球、短遮 (遊撃手) 等

・多数の野球に関する俳句や短歌を残している

例) 草茂み ベースボールの 道白し

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れども飽かぬかも
うちあぐるボールは高く雲に入りて又落ち来る人の手の中に

—コーチの定義—

・コーチは四輪の馬車を指し、“導く” という意味を持つ

つまり、目的地まで安全に送り届けるのが指導者の役割であり、ティーチではない

～新入部員の指導についての班別討議～

ここでは新入部員へ指導について各受講者から意見が出され、それを班ごとに討議し発表する形で進んでいった。新入部員の指導に関して、現在も模索中の私にとっては、各受講者が工夫をこらし指導されているのを聞くことは勉強となり、今後の新入部員への関わり方について考え直すきっかけとなりました。

諸先輩方はすでに実践されていることばかりだとは思いますが、ご一読ください。

《班ごとの発表》

- A 班
- ・重視するのは学校生活であり、生活リズムが確立できるまでは無理させない。
 - ・朝ミーティングを実施し、部の考え方や決まりを理解させる
 - ・個人面談を実施することで、問題の早期発見に当たっている
 - ・練習時間の配慮
 - 中間考査までは学校生活を優先させる
 - ・保護者への説明を入部前に行う
 - ・軟式・硬式の溝をいかに埋められるか
- B 班
- ・野球人口の減少にともない、新入部員が少ない現状がある
 - ・色んな考えを持つ生徒に高校の野球とは何か、を理解させる
 - ・未熟な存在である新入生を見守っていく姿勢を持つ
 - ・野球が少し上手くなる → 楽しくなる → 勉強も頑張ろう
 - ・褒める場と時間を設ける
 - ・連合チーム（大会に出られた、野球がやれる）
 - ・厳しさ、優しさ、色んな事を経験
- C 班
- ・目標設定を明確にさせる
 - ・怪我への注意（フォームが安定しないのでトレーニングは先輩とペアを組む）
 - ・一人の行動が周りに迷惑をかけることを理解させる
 - ・自信が持てない生徒への対応
- まとめ
- ・野球部員 16 万 8 千人 = 継続率 89.7%
 - ・中体連では 2 万人減少 → 野球人口の減少
 - ・説明会で野球部の表と裏を伝える
 - 本音を言う（思っていたのと違ったが 1 番怖い）

《講師より》

東先生

- ・挨拶・清掃から教える
- ・ボールをできるだけ触らせる（野球が好きだから野球部に入った）
→ただし、練習は6時30分までにして帰らせる。
学校生活・寮生活に慣れる事を最優先に考える
- ・1年生と2・3年生では置かれている環境が違う
- ・目標設定を明確に。（なぜ敦賀気比にきたのか）
*指導者の情熱はブラさない
→1年生にも本気でぶつかる
許さない事は許さない

大藤先生

- ・かける言葉の影響の大きさを考える
→“言霊”大きくて強いものだという自覚
一言一句を取捨選択する。 情熱・励ます
- ・先生と呼ばれることを勘違いしない → 自分をかえりみる

山下先生

- ・38年間問題行動無し → 人間性をいかに伸ばすか
20代ーガムシヤラ 30代ー知 40・50代ー心
- ・“高校生のために”これを忘れない
→山下先生は高校野球の監督を最高の職業だと思っている
- ・軟式・硬式の派閥を無くす
(子ども・親のコントロール)
- ・軟式は時間がかかるが、怪我が少なく伸びる。硬式は即戦力だが怪我が多く伸び悩む
- ・私生活 → 勉強 → 野球 *この順番を間違えない
- ・心のない人間は何をやってもダメ。心を育てる！

- ・東北・北海道は強い＝マナーが良い
→指導者が新しい高校野球を作ろうとしている
- ・ALL JAPANの選考では、負けたチームをみる
負けた時に“本当の姿”がでる。短期決戦では心の勝負。通じ合う選手が大事
- ・赤点の選手はグラウンドに机を持ち込み、みんなの前で勉強に取り組ませる。
- ・選手と目標を合わせる
→俺が連れて行くー× 一緒に甲子園に行くー○

- ・インタビューを受ける姿で強さが分かる
→何度も甲子園にくる監督には理由があるはず。
- ・1年は“礼儀”2年は“努力”3年は“感謝”を教える。
1年生と一緒にご飯を食べ、お昼休みに野球部のルールについてテストをする
- ・頭で勝てるチーム
(ルールのプロをつくる。進学校は強い。)
- ・生徒との対話 (HR担任、養護教諭との関係を密にして情報を受け取る)

《受講者からの質問》

Q：辞めたい部員への対応についてどう考えますか？

山下先生

- ・3日以内が勝負 3日持てば3ヶ月もつ 3ヶ月持てば3年もつ

Q：メンバー選考に関する下級生の考え方

山下先生

- ・メンバー選考の前は寝られなくなる
→その年だけでなく“常勝”を作りたい！ ex:3年10人、2年5人、1年3人

《その他》

- ・中学野球から高校野球にきて活躍する指導者が多い
→この決め手は何なのか。 研究したら面白いのでは？
- ・自分のスタイルで勝つことはない
→自分を打ち破る為にはどうするか！

* “なぜ？”この視点を持ち続ける。

* 人と同じではなく人と変わったことをしていく。これが大事！

・西谷さんの大阪桐蔭高校は、強豪校だが細かい気配りをし、選手と一緒に一体となって練習している。

③フォロワーシップの定義

「リーダーの指導力を引き出し、リーダーのかじ取りを支える力である。そして、卓越したリーダーシップの陰で必ず存在する現場の力である。また、自らが所属する組織やそれを支えているリーダーに対し、誠実な貢献と建設的な批判を使い分けながら歩む、主役たちの偉大な力」吉田典生

米国の研究によるとリーダーの影響力は良い悪いに関係なく 20%である。残りの 80% はフォロワーが握っている。

⇒どんなフォロワーを育成できるかが鍵となる。

4. 部活動の役割

①教育の一環としての高校野球

- ・座学では学べないものを学ばせる

②高校野球と生徒指導

- ・追い込みすぎると生徒に歪みが出てくる
 - ⇒他職員と連携とる必要性（HR 担任や教科担当等）
 - しかし相互に頼っている状況は危ない
 - ⇒自らやる姿勢は常に持つておく
 - 小さなことでも情報を報告・確認・共有していることが大切

目に見えているということは問題が表出している状況

⇒小さな変化でも即対応

③大会参加者と共同の主催者

- ・野球部以外の生徒とも時間を見つけて面談を行う
 - ⇒認められ感が生まれる
 - ⇒野球部にとっての良いフォロワーになる
- ※これがうまくいかないと野球部の生徒に不満出てくる
 - ⇒「野球だけやっていたらいいや」という悪循環に陥る可能性

5. その他

- ・顧問不在時の安全管理・指示徹底が図れているか
 - 「裁判で負けるのは現場」弁護士談
- ・管理職への報告をまめにする
 - いいときも悪いときも含め、困っていることも報告する

～部員とのコミュニケーションの図り方～

ここでは日本高校野球連盟の古屋さんが司会となり、講師の方々が部員とのコミュニケーションを図る上で大切にしていることを話していただき、その後、受講者による質問に対して講師の先生方からお話をいただく形で進んでいった。それぞれの先生方のお話はもとより、受講者の方々の苦悩と工夫が垣間見え自身を振り返る良いきっかけとなった。

以下に、出てきた内容をまとめましたので、ご覧ください。

《講師より》

○部員とのコミュニケーションについて心掛けていること

東先生

- ・ノックで声をかけ一緒に練習をつくっていく
- ・打撃投手やティーのトスを上げながら、選手を鼓舞しコミュニケーションを図る
- ・寮生活などグラウンド以外の顔をみるようにしている

大藤先生

- ・ノックは生徒との会話
 - ・昼休みは毎日一緒にご飯を食べる
- できるだけ野球以外の会話を心掛けているが、口煩くなってしまうことも・・・

山下先生

- ・1日1人10回声がけを行う
 - ・打撃投手を今でも努める
- 相手が苦手な球、打ちやすい球 ⇒ 生徒を観察する手段
- ・ノックでの会話（ノックの技術で生徒を惹きつける）
 - ・弁当を一緒に食べ、弁当の内容を見る
- *量や内容など、足りないものを親に連絡する

○年齢を重ねるにつれて変化したこと

大藤さん

- ・厳しく叱った生徒がひきつけを起こした
- 大事な預かった生徒をどのように大切にできるか・・・
- 教員として何を教えたんだろうという疑問が浮かんだ
- ・年齢ではなく“きっかけ”で変わる
- 自分にあった出来事で、何を感じ、何を考えるか。

山下さん

- ・野球が好き、グラウンドが好き、人が好き
- ・第三者の目を大切にする
→自分では見えていない部分が見えている
- ・尾藤さんは、“待つ”“信じる”“許す”の3つを大切にしていた。
- ・鏡で15分ならめっこ・・・顔の研究をした
(自チームの選手の表情、相手チームの監督の表情から色んなことがわかるようになった)

- ・良い人と出会う
 - ・良い本と出会う
 - ・良い旅と出会う
- } 指導者としての感性を磨く！

*教員の狭い世界だけではなく、教員以外の人物から学ぶことが大切。

- ・監督の先を見る選手・マネージャーをつくる
- ・握手で相手を理解する。(相手の手からは意志や感情が伝わってくる)
- ・選手の顔、小便、便まで理解するのが指導者

*生徒は監督をみている！ その意識を常に持つ！

○学校生活とグラウンドでの部員との接し方

- ・たわいもない会話を大切にする。
 - ・指導者として妥協する部分と妥協しない部分を分ける
 - ・グラウンド内とグラウンド外の選手の変化を見逃さない
 - ・本物に触れる機会をつくる
 - ・指導者としての考え方の“幅”を広げる
-
- ・グラウンドが全て。練習でやったことが全て。
→あらゆる状況に対応する準備
-
- ・顔色に出さない指導者・投手の方が良い
(東さんはやりづらい)

○部員が「やめたい」と言ったときの対応

東さん

- ・辞める＝逃げる（1回マネージャーをやらせることも・・・）

大藤さん

- ・一時の気の迷いなのか、本気で考えているのか。 “見極める”

山下さん

- ・県外の選手を辞めさせてしまった経験
 - 学級担任・養護教諭・授業担当・・・色々な人の話を聞く
- ・生徒と保護者に指導者の真意が伝わらないケースが多い
 - “対話と会話”＝何を、どうなのか。 *根本をすり合わせる
- ・自分なりに原因を探る＝常に“なぜ”という視点を持つ
- ・主将とマネージャーと繋がる。
 - 朝ご飯（モーニング）・・・
 - 練習内容
 - 意見
 - 私生活の話

- ・山登り＝サボる選手は度胸がある（大事）
 - エネルギーのある選手を見極める

～不祥事件の取り扱いの防止～

講師：日本高等学校野球連盟 常本 明審議委員長

ここでは不祥事件の現状から対策までお話をいただいた。年間約 1000 件の不祥事が起きている現状を踏まえ、指導者として何に気をつけていくべきなのか、改めて深く考えるきっかけをいただいた講義でした。講義中に日本高等学校野球連盟から新しい不祥事の連絡が入ったこともあり、緊張感のある講義だったように思います。

以下に、講義内容をまとめましたので、ご覧ください。

《不祥事件の取り扱い》

学校→都道府県高野連→日本高野連事務局→審議委員会→業務運営委員会→審査室

- ・指導＝注意、嚴重注意（改善報告書の提出）
- ・処分＝対外試合禁止、謹慎、登録抹消、除名

《不祥事件の防止・撲滅》

- ・部員とのコミュニケーション

野球部入部の動機

ノックは監督と選手との最高の会話の場

キャッチボールは選手同士の最高の会話の場

- ・部長と監督のハウレンソウ

相互の報告・連絡・相談の重視

⇒部長と監督が父と母になり、野球を通じて生徒を育てていく。

- ・仲間づくり

喜びを共有するように、悩みや苦しみも共有できる仲間作りができればいじめはなくなる。真の連帯を育てよう！！

《講義の中から抜粋》

- ・年間 1,000 件の不祥事が起きている
つまり、1日3件程度不祥事が起きている計算になる
- ・体罰は即効性はあるが、本当の指導とはいえない

～不祥事発生件数のグラフより～

- ・ H24、H25 に多いのは桜宮高校の事件後の後追い調査によるもの
- ・ H27 は暴力・いじめは依然として多いが、飲酒・喫煙・恐喝・窃盗・万引きが増加している
- ・ 部員による不祥事は5月～7月が多い
→新入生に対する暴力（受け入れる側の2・3年生への指導）
- ・ 10月にも部員による暴力が多いが、これは中心選手とその他の選手の溝が生んでいると考えられる。（主将を孤独にしない）

- ・ 規定の遵守を念頭に置く

- ・ 1年次の体罰を3年次に保護者が報告するケースが多い
（メンバーに入れなかったから・・・メンバー外へのケア）
- ・ 隠蔽は高野連も助けることができない。 → 報告遅れは処分が重くなる
- ・ 寮内での不祥事の増加

〈どうやったら不祥事件が減るのか〉

- ・ 夢や目標のない生徒をつくらない
- ・ 新入生を迎える側への説明・指導
- ・ 監督・部長がお互いの立場を尊重し合う
- ・ 高野連からの通知・通達に必ず目を通す
- ・ 分からない場合はすぐに連絡して聞く

〈最後に〉

- ・ プロは勝利して和となす
アマは和して勝利す。

- ・ 体験に基づいた指導ではなく、人生経験に基づいた人作りをすべき

～体罰についての班別討議～

ここでは、体罰に関する討議を3班に分かれて行なった。その後全体会として発表を行い、講師の先生方よりアドバイスをいただいた。体罰は今回の甲子園塾でも特に重要な講座のように感じた。根本は絶対に良くないという立場に立ち、なぜ体罰が起こるのか、体罰を経て何が変わるのかといった内容から、自分自身体罰をしてしまいましたといったデリケートな部分にまで話が及びました。

そこで考えたことは、体罰を受けた本人はもちろん、その家族や友人まで巻き込み大きな傷を残すということ。そして指導者自身を守るためにも体罰という手段を選ぶことが決して良くないということである

体罰は絶対に良くない。ではどうしたらその考えから脱却できるのか。討議の内容を以下に書きたいと思います。

《班別討議》

A班

- ・体罰を受けた側の経験者は多かった。
 - 今の立場だから「体罰は悪いとは言いきれない」だけで、私たちの立場でなければ、受け止め方は違うはず。
- ・体罰と同時に言葉の暴力の問題が増えてきている
- ・新入生や考え方が未熟な生徒にどのように伝えていくか。
- ・当事者同士ではなく、第三者が関わってくるパターンの増加
- ・報道によって、チーム・個人ともに大きなダメージをうける
- ・足の引っ張り合い
- ・本当の意味で応援され、助けてもらえるチーム作りをしたい
- ・感情を抑えるために、6秒・6mといった時間と距離をとる。
- ・自分が叱っている姿を第三者の目で見つめる
- ・山下先生のノックから厳しい中にある愛情を感じた。
 - 「怒っているけど冷静だぞ。」役者の一面
 - 生徒への話しかけ方
 - ボディータッチ

B班

- ・生徒がミスした後に体罰は起こる（ミスの内容を見極める）
- ・やる事をやらない → ふてくされる（怒られ方を教える）
- ・生徒理解・生徒に応じた指導 “生徒と向き合う”
 - *指導者側のねばり

C班

・体罰はなぜダメか

→指導力不足の結果が体罰

ルールを守るべき大人がルールを守るべき

体罰をされたという思いしか残らない

・ どういったときに手を出してしまうのか。

→無気力、人として許せない行為

・ ダメなものはダメ。自分の引き出しを増やすことが大事！

〈講師の方〉

東さん

・ 子どもにもルールがあるように大人にもルールがある

→子どもにルールを守らせるなら大人もルールを守るべき

(大人だけ破るのは違うのでは?)

・ 正直殴った方がこの選手のためでは・・・と思うこともあるが、でも話す。

大藤さん

・ 暴力(体罰)で人は変わらない

・ “感じ方は十人十色” “受け取り方も十人十色”

・ 体罰は自分のイライラの延長にある

→自己研磨を大切にする

山下さん

・ 尾藤さんの想い

1) 甲子園塾は自分と同じ過ちを犯さないための指導者養成施設である

2) グランドは畑である。開拓整地し、肥料をまき水をやり、育てる気持ちが大切。

不作だと物言わぬ農作物にあたるのか。

明らかに世話不足である。

・ 愛情と信頼によって“真の絆”が生まれる

・ 生徒を惹きつける魅力ある指導者になる

・ 時の流れ、社会の変化の柔軟性に対応する

・ プライドや実績を捨てる(邪魔して見えないものがある)

- ・練習では ミスを叱る 同じ失敗をする
 誉めてから指摘 同じ失敗をしない
 - ・“見つけて” “育てて” “活かす” → 指導者の勉強が必要
 - ・教え子は山下ファミリー。みんなに平等に扱う
 - ・構図が変わった昔は、教師 親 子
 今は、教師 親子
- *親は子を信じ、子は都合の良いように話す → トラブル

③暴投への謝罪（マナー）

④ルール（暴投を走って捕りに行く）

⑤危険認識

・キャッチボールのレベルは同じレベルの相手を選ぶ 慣れ合いは×

e x : 1 - 1 2 - 2 4 - 6 5 - 3

大藤先生

・野球はボールを持っている方に主導権があるスポーツ

→試合なら守備・投手 キャッチボールなら投げ手

*心を通わせ、ボールを相手がプレーしやすい所へ投げる。

→どういう動作だと次の送球に繋がるか

→どういう球を投げたら相手がプレーしやすいか

・足と目で捕る・・・目とグラブとの距離感を大切にする

・キャッチボールの相手は味方

→仲間への思いやりが大事！！（心のやりとり）

・ボールを視界に入れる

・自分が動き、ボールへの向きを合わせる

・身体の向きは横を向くのではなく、正対しているのが望ましい

→ボールの捕球は引き込む動き

一捕る一

・ボールが進行方向に進んでくるのを遮る動き。けっして捕りにいくわけではない。

（ボールをグリップする）

・一連の動作としては・・・

①捕る（進んできたボールを遮る・グリップする）

②掴む（縫い目に指をかける・・・遊びの中で掴むことも）

③見て（どこに・どんなボールを投げたいのか）

④投げる（相手のことを考えて投げる）

*捕るという行為は投げる為の準備 → 投げる為に捕る

東先生

- ・捕手はキャッチボール時から防具の着用
- ・右・左・捕球・右・左 送球の順番を覚え込む

*捕ること・投げることを分断しない

- 投げやすい体勢で捕る
- そのために足の運びで捕る

《ミーティング》

- ・集合が遅い 0.1秒で70cm進むスポーツ
相手より早く！
全力疾走は高校野球の基本であり、球場を味方につける手段でもある
- ・目の変化 野生味のあるチームは強い

《ボール回し》

山下先生

- ・暴投を暴投に見せないのがファインプレー
- ・ノーミスを指示すると自然と右手が近くなる。
正確に！丁寧に！ この気持ちをなぜ最初から持たないのか・・・

大藤先生

- ・正確に → 速く → 強く *順番を間違えない
- ・足を使って送球する距離を縮める
- ・捕り幅がないと捕らされる
捕らされると絶対に次のプレーに影響が出る
(ボールの行方を遮る・そこに足を使って動きグローブを運ぶという感覚がない)

《トスバッティング》

山下先生

- ・バッティングの基本であり、どこでも出来る練習
- ・目を離さず、5～7mの距離で行う
- ・バリエーションを増やす (ノーバウンド、ワンバウンド、3方向、コース打ち分け)
- ・トップからヘッドを下げない
- ・捕り手のリズム・良い球を投げる・足を使う

(王さんはスランプ時にトスバッティングと走り込みをしていた。)

- ・グリップの握り方でプレーが変わる（パームグリップ・フィンガーグリップ）
- ・ヒットゾーンは5方向
→最も確立が高いヒットゾーンはセンター方向
- ・バントの位置が捉えるポイント

大藤先生

- ・芯の位置を確認する
→バットを持ち、目を瞑ったまま後ろの手を離し、芯を持てるか？
バットの芯の位置を把握し、どの位置を芯が通過するのかを理解しておく必要がある。
- ・打撃に関しては後ろの手を前肩を開かずにどれだけ出してこられるか。
→身体の正面を投手に向けない為には、ヘッドが出てこない状態を作れるかが鍵になる
- ・ヘッドをいかにして走らせるのか
→身体の捕手側で縦ぶり・・・ヘッドの重みを感じる
- ・8の字回転での素振り → ヘその前で交差させることでポイントの確認になる

東先生

- ・トスバッティングは、守備・ハンドリングの練習と捉えている
→3人一組でトスの練習や、バックハンドなど様々な応用練習が出来る
- ・小指方向から振りに行くのではなく、極端に言うと親指方向から前に回るイメージ

《打撃》

金属バットの打ち方を教えていると割り切っている

- ①スイングスピードを上げる
- ②速い球への対応力をつける

*大前提として、この2つがなければ対応できない

《バント》

大藤先生

- ・立つ位置の考え方はチームの考え方で良い。
ex：角度、投手との距離、塁との関係
- ・ボールと目とバットの関係性
*ボールは逃げるがストライクゾーンは逃げない
→自分から近づかない・のぞき込まない
- ・ヒッティングから構えに入るときは足を踏むとリズムが取りやすい

- ・セーフティーバント：バックスイングの動作を出してから構えに入っていく

《ノック》

山下先生

- ・守備は監督の責任
打撃は選手の責任
- ・汎愛高校の選手から“変わりたい”という意志が伝わってこない
- ・ノックでの対話（選手に魂をいれていく）
- ・指導者も命がけでノックを打つ・・・選手も命がけでノックを受けて欲しい
（そのためにグラウンドが命をかけられる状況になっていないのは有り得ない）
*グラウンドへの愛着を強くもって欲しい
- ・選手を上手くする為にノックバットにもこだわり、身体にも気を遣っている
- ・ボール渡しは技術が必要（マネージャー・控え選手）
（ボール渡しの練習を消灯後繰り返すマネージャーがいた）
- ・ノックバットは前の手で持つ
→後ろの手で打つと身体の開きで方向がわかってしまう
- ・ノックを漠然と受けるのではなく、「なぜ？」という視点を常に持つ
（伊勢谷工業？）



- ・声には3つの声がある

①指示の声

②励ましの声

声の迫力が大事

③予測の声

- ・ファーストの捕る位置にこだわっているか・・・
（一番伸びられる位置はどこか。プロはどこに投げているか）

- ・投手のグラブトス

→横に振る ノーマル・トスが無理でファースト送球も練習する（動作の変更）

e x : : 練習試合ではあえて先頭打者を死球で出し、ダブルプレーを取る練習や、エンドラン・スチールだけをかける練習をすることも

- ・指導者の「心のコントロール」
 - 指導者は怒っていても心は冷静で無ければならない
(若い頃は怒っていて、本当に怒っていた)
- ・球際：最後の1歩の粘り強さをつくる

*バントとバスターの見分け方

→バントは前肘がでてくる　バスターは前肘が後ろにひかれる

～イメージノック～

- ①グラブにボールを入れておく
- ②ノッカーの動きに合わせて動き、両方向飛び込んだ状態を自らつくり投げる
 - *崩れた体勢（飛び込んだ状態）からの送球の練習

- ・帽子は走者3塁のときの打球判断において凄く役立つ
打撃の際に深くかぶる等で利用できることも・・・
- ・投手のグローブは黒がサインを盗みづらい

～無言ノック～

- ・あえて無言でノックしてみると、声の大切さが自然と分かる
- ・みんなで声を掛け合うから頑張れるし、楽しいと思える

*山下さんのノックが上手い

→自分自身のノックの技術を上げることは選手の成長に繋がる

*ミーティングや声かけの際のボディータッチで選手との距離を縮める

～喧嘩ノック～

- ・チーム作り
- ・下半身の動き作り
- ・最後には全員が一人の為に声をかけていた
- ・主将が終わった後に山下さんのタオルで顔を拭いてあげる姿に山下さんの人柄が表れていた

～外野ノック～

東先生

- ・NEXTプレーへの意識
- ・外野からの送球を繋いだときに、必ずその後ろのラインに選手がいるようにする
- ・捕球だけのノックはしない。

目的は走者をアウトにすることであり、送球のミスが6割を占める高校野球においては必ず送球まで練習に入れる

→ネットではなくできるだけ送球を受ける人間を置く。(評価をする)

《投手指導》

東先生

* 体重移動が苦手な投手への指導

- ① ゴムチューブを足首にかけクロスさせる
- ② ノーステップ (実際の歩幅より1足~1.5足狭く)
- ③ 右肩が前に出る状態まで投げきる
- ④ 右腰が前に来るまで投手方向に力を使う

* 下半身の使い方を覚える

後ろ足のバランスを鍛える



* ボールを持つと上手くできない選手はシャドーから

プレート	この空間の中で身体を使い切る この空間から外れると力が捕手方向に向かない
------	---

—投球練習—

- ・ 10球—ポール間—3球立ち投げ—10球
- ・ 曜日によって5セット・10セット
- ・ 実際の試合に即した投球練習 → 疲れた所での気持ちと身体のコントロール
走りの重要性・下半身の疲労がある状態での投球
- ・ 投手は表情に出したら負け・・・訓練

☆力感=スピードではない (0→100のイメージ)

—クイック—

- ・ 無駄な動きを省く。(省いて良い動きと省いてはいけない動きがある)
- ・ つっかえ棒を外すイメージや、足を後ろに曲げるイメージ
→マウンドの幅の空間から出ないイメージ (この空間から出ると遅くなる)

* 投手指導の基本的考え方

- ・ シンプルに考える
- ・ 変化球は遊びの中から掴ませることが大事。(自分で掴んだ感覚が最後に活きる)

・投手をピッチングだけで育てようとするしない

- 投手も打撃をどんどんやらなければならない。(スイングの中で下半身がキレてくる)
- ショートにも外野にも入れる
- 色々な動きを自分でコントロール出来るようになる
- 投手は上半身W-T Rは基本的にしない(レンジとスクワットくらい)

・遠投は投手には大事(ただ甲子園では遠投できない)

- ・20m-23mで思いっきり投げる
 - 変化球もこの距離で投げてどう曲がるかを自分で見させる
- ・コントロールが悪い選手
 - 選手が楽な状況をつくる(真ん中から散らす)

・勝てる投手 → 外の出し入れ

―選手権大会に向けての考え方―

- 夏は自然と投手は下降線をたどる
 - 高校野球では回復するタイミングがないので、あえてピーキングの為に追い込みをしない
- 夏前は投手に任せる・・・自分と相談させる

《走塁》

東先生

―1 塁走者―

①帰塁

- ・帰塁からの立ち方は投手方向に反転
 - (複数走者いるときなどこちらの反転の方が良い)
- ・ベースのタッチの位置は投手側の角
 - ファーストの立ち位置を考えたときにベストボールがこないときにはタッチしづらい
 - そこに帰塁するためにはベースの内側のラインを結んだ位置にリード
 - 右足を半歩後ろ・つま先の角度を45度までは向けてもよい

②盗塁

- ・右足のつま先を進行方向に向けることを推奨
 - ①右足を抜く
 - ②右足から動かす 選手に実際に試させ選ばせる
 - ③クロスオーバー

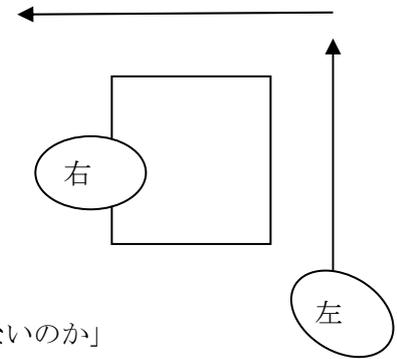
③スライディング

- ・とにかく近くから滑らせる（スピード感、抵抗）

④ベースの踏む位置

- ・膝とつま先が方向を決める
- ・足を合わせる動作ができるなら逆足で踏んだ方がよい

*現在取り組んでいるベースの踏む位置は右図
触塁ではなく、加速する道具として利用するイメージ



大藤先生

- ・陸上の先生に「なぜ平面のグラウンドに立体のベースがあるのに、利用しないのか」と質問され、ベース前で膨らむことの常識を疑うようになった。

—2 塁走者—

①リード位置

- ・0死 オンライン
- ・1死 2歩後ろ
- ・2死 4歩後ろ

②シャッフル

- ・右足が浮いた状態でインパクトをむかえる
→合わない選手は大きく跳ばして練習させる
大きく跳ばし、空中で合わせる感覚を養わせる。
右足は進行方向にむけて空中でインパクトをむかえる

③約束づくり

- ・低いライナーに関してはバック
- ・外野フライ：捕球体勢に入る → タッチアップ
捕球体勢に入っていない → ハーフ
- ・内野ゴロ：右打球 → ストップ
左方向 → ゴー

④2→4の走り方（徹底的に練習する）

- ・試した結果、ベースの50cm後ろに向かって走る
- ・2→3と3→4のスピードでは、3→4のスピードの方が2→4に相関性がある

つまり、2→3のベース前で80%になったとしても、ベースを加速する道具に使えた方が
良い

⑤ コーチャー

- ・年間通して変えない。ルールとタイミングを掴ませる

ーその他ー

- ・決め事が頭に入っているか、分かっているつもりではダメ
→Bチーム、新チームで徹底的に教え込む
- ・走者2塁から1本で返る練習をしていれば、最低2死2塁を作ることを考えれば良い
- ・3カ所打撃では走塁の練習を平行して行う
→走塁の“タイミング”と“打球・状況判断”は実際の打球に合わせて行わなければ掴めない

山下先生

ー3盗ー

- ・左投手からの3盗は敢行しやすく、変化球の握りならば牽制がないと考えて良い
→逆に守備側は変化の握りを見せて、握り替えて牽制というパターンもつかえる
- ・走塁の積極的な姿勢は責めない（この姿勢を失わせない）

大藤先生

- ・叱るべきポイントは全力疾走を怠ること、アウトになる前に決めつけた走塁をすること
→1塁までの飛球の走りを見ると、そのチームの意識がわかる
必ず落ちるときがある。その方が一に備える姿勢があるか・・・
*全員がやるからプレッシャーになる
→走力に関係なくできることをルールとして定めることが大事
中心選手が手抜きをしたらチームは終わる

山下先生

- ・美しい＝手抜きをしない

東先生

ー3塁走者ー

- ・ゴロゴロは投手前もいさせる
- ・つま先を向ける（上体を向ける×）

◇セーフティースクイズ

→100%のプレーなので、使いたいなら練習を積むべき

練習で確立が低いプレーなら試合ではスクイズを選択すべきでは？

*責任の所在を監督に持っていくことが生徒がプレーしやすい状況を作ることになるのでは？

e x : スクイズとセーフティースクイズではスクイズの方が指導者が責任をかぶれる

山下先生

・統計では盗塁は0-0 1-0 2-2の順番で決まる確立が高い

《ノックの実戦練習》

ここでは実際に大阪市立汎愛高校の選手を相手にノックを打ちました。山下先生のノックを昨日見たこともあり、各受講生が工夫を凝らし生徒とノックを作り上げようという雰囲気非常に伝わってきました。

各受講生に与えられた10分でしたので、事前に選手を集め私の意図することを伝えノックに入りました。具体的なノックの打ち方の指導だけではなく、選手との「会話」の仕方について教えていただき、とても参考になりました。

～参考資料～

第1～7回甲子園塾報告書 各受講者
第8回甲子園塾要項
第8回甲子園塾「都道府県連盟の役割」, 小島仁章
第8回甲子園塾「球史から学ぶ」, 井本 亘
第8回甲子園塾「部活動の役割と課題」, 小島仁章
第8回甲子園塾「不祥事件の取り扱いと防止について」, 常本 明
第8回甲子園塾「指導者としての基本的な考え方」, 東 哲平
第8回甲子園塾「指導者としての基本的な考え方」, 大藤敏行
PLAY TRUE Book アスリートガイド, JADA
2015 世界アンチ・ドーピング規定
長野県高等学校野球連盟ホームページ
日本学生野球憲章
日本高等学校野球連盟ホームページ

～おわりに～

3日間の日程を終え、さまざまなことを考えました。2日目の夜には講師の先生方も交えた懇親会を開いていただきました。全国から情熱あふれる受講生が集まっていました。輝かしい実績を残している先生方でも失敗を経験してきていることを知りました。受講生も日々の指導に悩みながら信じた道を突き進んでいる姿がありました。そして野球の話をするのはやはり楽しいと感じました。

「甲子園は呼ばれる場所であり、甲子園に相応しいチームが出場する」

甲子園塾の価値がここにあると思いました。あるべき姿を求め日々研鑽を積んでいく。必要とされるのは、生徒への深い愛情と野球への深い愛情だろうと考えました。生徒への深い愛情を持って日々コミュニケーションをとり理解を深め、生徒の心身の発達を願いときには母のようにやさしく、ときには父のように厳しく接していく。生徒の成長を何よりも喜び、互いに高め合えるような集団へと変化させていく。そして野球への愛情を持って野球の歴史を始め、特性から戦術、ルールに至るまで隙間なく網羅すること。野球の持つ人々を動かす力や難しさを十分に認識した上で、野球で人々を幸せにしていくこと。

今後、数多くの困難にぶつかると思います。挫折そうになることもあるかもしれませんが、そんなときには甲子園塾で学んだこと、生徒への愛情と野球への愛情を思い出したいと思います。

閉校式や雑談の中で講師の先生方がおっしゃっていたことをここに記します。

- 「グラウンドでは百姓のつもりで、作物を育てるつもりでやりなさい」
- 「人生とは出会いです。いい人、いい本、いい旅に出会ってください」
- 「キャプテンとマネージャーを大切にしてください」
- 「正しい野球用語、正しいルールを高校生に教えてください」
- 「ケガをして休ませる際にメニューも指示できる医師を探してください」
- 「困ったら高野連に相談してください」
- 「指導者も選手と同じように身体のケアをください」
- 「家庭も大事にしてください」

最後に、甲子園塾という素晴らしい環境で学ばせていただいた事に心から感謝をし、目の前の生徒のため、長野県の高校野球をより良い形で発展させていくために力を尽くしていきたいと考えております。

お読み頂きありがとうございました。

報告書作成者連絡先（質問等ありましたらご連絡ください）

氏名 高重 陽介

勤務先 長野県飯山高等学校 住所 〒389-2255 長野県飯山市大字静間 1088

電話・FAX 0269-62-4258（体育科直通）

報告書作成者連絡先 携帯 090-9359-6307